

お悩み解消通信講座1 サンプル

※最終編集前のデータにつき、販売データとは多少変わる可能性があります。

「はあ……」

かぶらやしゅうすけ

鏑谷秀介は人事ファイルを捲りながら深いため息を吐いた。

先月だけで二人も退職してしまった。しかもその補充要員はまだ一人も見つかっていない。

「先輩？ どうしたんですか、ため息なんて吐いて」

隣のデスクの上田が上体を伸ばし、手元のファイルを覗き込もうとしていた。席は隣でも、上田は人事には無関係。個人情報のお塊であるファイルを気軽に見せるわけにはいかず、静かに閉じて鍵の掛かる引き出しにしまう。

「なんでもない。この年になると体内に留めておける酸素量も減っていくんだ」

「またそういうこと言って誤魔化すんですから」

社内で秘密主義だと言われていることは承知していた。しかし上田のようにストレートに笑う者は少ない。

「そういえば、求人への応募があったようですよ」上田が鏑谷のパソコンを指差した。

「見た」

「で？」

「——だめだ」

募集を出していることは当然把握しているし、応募があれば早い段階で確認している。しかし、人が足りないからといって簡単に雇うことはできない。

鏑谷が勤めている会社は、悩める男性を救うための——性的な悩みを解消するための講座を開いているカウンセリング業……風俗だ。

講座の種類は複数あるが、受講スタイルはDVDを見ながら自分で練習する通信コースと、通いで指導員から直接指導される通所コース、それらを組み合わせた通信通所コースの三種類。

この二か月、鏑谷の頭を悩ませているのは通信コースのDVDに出演する男優の不足だった。

「なんでダメなんです？ 業務内容を分かった上で応募しているんですから——」

「ペアを組みたいという人がいなかった」

「あ……」

上田が目を閉じて天を仰いだ。それは仕方ない、と思ったのだろう。

「なんなら、お前が組むか」

「いや、それはちょっと」

上田には恋人がいる。残業すら許さないという束縛タイプのようなから、他人の体をいじ

る仕事など、到底受け入れられるはずがない。

「それなら、先輩はどうなんですか？」

「無理に決まっているだろう」

そう言いながら、内心ではそろそろそれも考えないといけないかもしれないな、と思っていた。

応募はそれなりにある。しかし攻め役である男優が足りなかったり、応募してきた子を受け入れなかったりで、どうにも話が進まないのだ。

しかしさすがにこのままではまずい。かなりマイナーな仕事……ではあるものの、一部の富裕層からは安定した人気があり、新しいDVDが出る度に——本来の目的とは違うけれど——数多くの発注がかかるのだ。ここ最近では本来の目的のために申し込まれるよりも、趣味として購入する愛好家の方が多くなってしまっている。

そういった購入を否定するつもりはない。会社は利益のために事業を行っているのだから、極論を言えば「売ればなんでもいい」のだ。それに皮肉にも、そうした人たちがいるからこそ続けられている状態だった。しかし、やはりできれば本当に悩める人に受講してもらい、少しでも楽になってもらいたいと思っていた。

人が足りないことは分かっている。しかし、どうせ出演するなら本当に困っている人のために出たい。だからこそ——。

「それより、次の発送準備は大丈夫なのか」

話を切り上げるために言っただけのつもりだったが、上田は血相を変えて部屋を飛び出していった。

(まったく……)

しかし、鏑谷自身もそろそろ同じくらい慌てないといけないな、と思い始めていた。

※ ※ ※

ペニスがむずむずする。射精がしたい。なのにいくら腰を振ってもうまく射精に繋がってくれない。気持ちいいのに、あと少しというところで快感の高まりが止まってしまう。

うつ伏せから体を起こし、ペニスを見る。勃起は……しているけれど、以前のような硬さがないような気もした。半分、いや三分の二ほどは硬くなっているけれど完全ではない。しかし床はカウパーで濡れている。

潤がオナニーを知ったのは、恐らく平均よりも遅い方だろう。十七歳で淫夢を見て、激しい絶頂感と共に目を覚ました。それが潤の精通だった。

それから四年が経った今でも、そのときは昨日のことのように覚えている。夢の中で潤は、何かに覆いかぶさり腰を激しく揺らしていた。硬いものに裏筋をぎりぎり擦りつける快感に喘ぎながら。

目が覚めたときは何が起きたのか分からなかった。まるで全力疾走をした後のように激し

く鼓動する胸を押さえ、茫然とした。起きてしばらくしても、ペニスはまだドクンドクンと、心臓のように激しく脈を打っていた。

寝ぼけた状態から徐々に頭がクリアになっていくとともに、それが夢の中のできごとだったことを悟った。それでもまだペニスはズクンズクンと熱い脈を打ち、震えていた。まだ足りない、もっと快感を寄せと訴えるそれに触れた瞬間、体中を一瞬で駆け回るような快感を覚え、思わず手でそこをきつく握った。

「ああ……」とため息のような熱い声が漏れ、オナニーの仕方も分からぬままいじり、しかし先ほどのような快感は得ることができないまま、興ざめだと言わんばかりに熱を失っていく。ペニスの機嫌をどうにかとろうとがむしやりに擦った。けれどそのときにはもう手遅れで、ペニスは萎え、体の高まりも落ちていった。大切なものを失ったような気持ちに泣きそうになりながら、ペニスを拭き、下着を洗った。

それ以来、毎日オナニーをするようになった。しかしどれほど手でペニスを擦ろうと、到底あの夢の中での猛烈な快感には勝らなくて。

そうして始まった床オナ。

初めてしたときは衝撃を受けた。求めていたのはこれだったのだと感動さえ覚えた。

しかしこの一か月ほど、あんなに強い快感を得ていた床オナでも物足りなく感じるようになってしまった。いた。

(やっぱりいけない……)

毎日しているからだろうか、と試しに一日オナニーをせずに見ようとしたこともあった。しかしどうしても射精をしないと落ち着かなくて。ムラムラしているわけでもないのに、つい床にペニスを擦り付けてしまうのだ。

テーブルの上に置いたままの携帯を取る。検索エンジンを表示させ、思いつくワードを入力していく。今までは床オナ以上に気持ちいいものなんてないだろうと思っていた。でももしかしたらあるのかもしれない――。

【床オナより気持ちいい オナニー】

どんなに方法を変えても得ることができなかったそれを上回る快感に胸を膨らませながら表示された結果を見て……呆然とした。

(え、え?!)

そこに表示されていたのは、床オナよりも気持ちいいオナニーの紹介ではなく、絶対にしてはいけない行為としての床オナだった。「危険」「床オナによる膣内射精障害」「今すぐやめて」「勃起不全の原因にも」。

小さな画面の中、床オナと組み合わせられた単語の中に魅力的なものは一つもなく、全てが冷や汗をにじませるほどの辛辣な言葉だった。

これまで女性に恋愛感情を抱いたことはなかったもので、「膣内」という言葉はどうでもよかった。しかしその後が続いていた「射精障害」は怖かったし、「勃起不全」という言葉には身に覚えがあり、焦りを感じずにはいらなかった。

いてもたってもいられず、慌てて他のページを確認した。しかしそこにもやはり、他のページにもあったような怖い言葉が並んでいた。一つ一つ丁寧に読んでみたけれど、焦りと恐怖と後悔で、全く頭に入ってこなかった。

「うう……」

床オナは、始めたばかりならまだ戻れる、と書かれていた。最初は苦しいけれど、しばらくやめるだけでペニスの感覚を取り戻すことができる。

しかし、精通のときから床オナでしか射精したことのないという潤に合致する記載は見当たらなかった。

——もう、ダメなのかもしれない。だって、床オナをやめるどころか床オナでは満足できなくなつて、それ以上の快感を求めて検索したのだ。

(どうしよう……)

しかし、考えていてもどうにもならない。とにかくやめるしかない。そう思い、その後もいくつかの解説ページを読み、ひとまず床に擦りつけるのをやめ、手で擦るだけにしてみることにした。

しかし翌日にはペニスを床に擦りつけて射精していた。

(うう……)

床に手をつき、体を起こす。

——またやってしまった。

床オナの危険性に怯えたのもつかの間……そこに書かれていた方法——手で擦るだけ——を試したけれど、一向に快感を得ることはできず、結局また床で腰を振ってしまった。

「はあ……」

鼓動が落ち着くとともに襲ってくる後悔。

床に這いつくばる前はとにかく射精がしたい一心で、「別に女の人とセックスする予定なんてないんだし」と思ってしまった。それがいけなかった。いや、それだけではない。手で扱っていた時間がいわゆる「焦らし」の時間になっていたようで、結果的にはいつもよりも気持ちいい床オナを経験してしまったのだ。

床オナの危険性を知る前なら大喜びで、手コキ時間をオナニーの前半に取り入れたことだろう。しかし今は後悔を増幅させるだけだった。

(やめなきゃ……)

やめないといけない。このままでは絶対によくない。

携帯を取り、検索エンジンを開く。

(床オナ、やめたい……と)

入力するとたくさんリンクが表示された。同じように悩む人はたくさんいるのだろう。

画面をスクロールし、よさそうなページを探す。しかし、なかなかこれだと思っサイトが見当たらない。

(やっぱりオナ禁するしかないのかなあ……)

でも自分の心の弱さは今回のことで痛感した。オナ禁なんてまず一日ともたないだろう。とにかく、どうにかして自分を律しなければ――。

検索結果を数ページ進めると、「床オナをやめられないあなたへ」と書かれたリンクを見つけた。タップし、ページが開くのを待つ。

【床オナをやめないといけない……そう分かっているのにやめられないあなたへ】
文章は、語りかけるように始まっていた。

【このページに辿り着いたあなたは、おそらく自分の意志ではやめることができないくらい、床オナにはまってしまっているのでしょう。

してはいけないと頭では分かっているのに、手では物足りず、つい床やシーツに擦りつけてしまう。なかには壁に擦りつけてしまう方もいるでしょう。

苦しいですね。

つらいですね。

私たちと一緒に、敏感なペニスを取り戻しませんか？】

言葉の全てが潤に向けて書かれているように感じられた。

このサイトは、この文章を書いた人は、潤のつらさを理解してくれる。それに「一緒に」という言葉が胸に刺さった。他のサイトでは床オナの危険性ばかりを示し、しかしその解決方法は危険なオナニーはやめましょうというばかり。誰も、このサイトのように潤の心に寄り添ってはくれなかった。

(えっと……)

文章の下には画像があった。数枚のDVDが並んでいる。関係のない広告リンクだろうか――スクロールすると、その下にも説明が続いていた。

【私たちは、あなたが床オナをやめられるようにサポートいたします。

☆あなたにオススメ

床オナ卒業&男性器敏感化講座

・通信コース

・通所コース

・通所コース

・通信通所コース

・通信通所コース

自分で頑張りたいけれど、つらいときは助けてほしいという方にオススメ】

その後にも、乳首イキ講座――ペニスでの射精ではものたりない方へ――やアナルイキ講座――秘密の扉を開きたい方へ――……と複数の講座案内が続いていた。

しかし、潤が受けるべきは床オナ卒業&男性器敏感化講座だけのように思われた。

(ええと……まずは資料請求……)

ボタンを押すと、住所や氏名を入力するフォーマットが表示された。こういうサイトに入力するのは少しだけ怖い。それに表示されている受講費も高額だった。それでも、もうここを頼る他ないような気持ちになっていた。

翌日には、A4サイズの大きな封筒がポストに投函されていた。さっそく開封し、中を見る。

(わ、すごい)

中にはパンフレットとともに、一枚のDVDが入っていた。

見たい。今すぐ。

しかし「最初にお読みください」という紙を見てしまった以上、先に見るわけにはいかなかった。

【竹下 潤様

この度は資料のご請求をありがとうございました。ご希望の床オナ卒業&男性器敏感化講座のサンプルDVDを送付いたします。

ご不明な点がございましたら二十四時間いつでもお電話ください】

続いて書かれていたのはフリーダイヤルだった。しかも丁寧に、携帯可と書かれている。

(ありがたい……)

紙を置いて、DVDをセットした。デッキの起動を待つ間に、同封されていたパンフレットに目を通す。

【こちらはサンプル用に制作したDVDです。本登録をいただいた後は、通常版をお届けいたします。また、最後に表示される一覧から、お好みの出演者をお選びいただけます】

そこまで読んだとき、テレビから男の子の声が聞こえた。

『こんにちは。この度は資料請求をありがとうございました』

画面の中にいたのは、二十歳ほどの可愛らしい男の子だった。顔のアップ——から、次第にカメラがひいていき、男の子の裸体があらわになる。

(わ、わっ!)

まさかAVだったのだろうか——慌ててパンフレットを確認するけれど、どこにもアダルトビデオであることは記載されていなかった。

『床オナ、つらいですね。僕も床オナが大好きで……おちんちんが痛くなっても、何度もごしごししてしまって、ダメだと分かっているのにやめられなくてつらいです』

その声は、演技ではないように聞こえた。

『僕も、一緒に頑張ります。だから、とつてもつらいけれど、一緒に敏感なおちんちんに戻せるように頑張りましょう』

男の子からのメッセージが終わると、画面は一度真っ白になった。続いて文字が浮かび上がる。

【はじめに】

文字が二秒ほどで消えると、先ほどの男の子と、もう一人男性——こちらは三十歳くらいの立派な体躯をしている——が現れた。

男の子は変わらず全裸だけれど、男性はグレーのスリーピースをピシッとスマートに着こなしている。

『こんにちは。今からご説明をしようと思うのですが——まずはこの子の普段のオナニーをご覧ください』

(え、えっ!?)

一人暮らしということも忘れ、周りの目を気にしてきよろきよろしてしまった。当然室内には誰もいない。ホッとして、音量を少し下げながら画面に視線を戻す。

『あつ、あつ、あんつ、あつ、あつ、いいっ！ すごいっ！』

指示をした男性はベッドに腰掛け、床に寝そべって腰を揺らす男の子を見下ろしていた。

『このように、自分の体重をかけてするオナニーを総称して床オナといいます。擦りつける対象が床でなくても、雑誌、シート、枕……ぬいぐるみであってもそれは立派な床オナです。このようなオナニーを繰り返していると、手はもちろん、パートナーとセックスをする際に中折れしてしまう原因となり、最終的には不妊に繋がることもあると言われています』

『ああつ、んっ、っふ、ああつ！』

男性が説明している間、男の子は必死に嬌声をこらえていた。しかし快感が強いのか、完全に止めることはできていない。

『おちんちん、気持ちいいですか』

『は、いっ！ きもちっ、きもちいいですっ！』男の子の腰の動きが激しくなった。

『おちんちん、潰れていませんか』男性が口角を上げた。

『つぶ、れてますっ！ ああつ！ きもちいいっ！』

男の子はまるで撮影していることなど忘れていくかのように、必死に腰ふりを続けている。『どうやらまだ射精には至れないようです、今のうちに教材の説明をしていきます』男性はちらりと男の子を見て、それから解説を始めた。『床オナ卒業&男性器敏感化講座の目的は、言葉のとおり床オナをやめ、床オナによって鈍感になってしまったペニスに敏感にすることです。しかし、この子のように床オナですらスムーズに射精できないほどになってしまうと、床オナをやめるのはとても大変です。到底自分一人の力では難しく、頑張ろうとしても途中で挫折してしまう……という経験から、みなさんここに辿り着いたのではないかなと想像しています』

男性の言葉に、思わず頷いてしまった。

『でも、もう大丈夫です。私たちと一緒に頑張りましょう。ただ、つらいです。とてもとてもつらくて……私はこれまで何人もの男の子に指導してきましたが、あまりの過酷さに全員が涙を流しました。それくらいつらいです。でも、頑張った後には喜びがあります。手で扱く、柔らかいオナホールを使う、パートナーの体内に挿入する……何をしても、ちゃんと気持ちよくなれます。むしろ敏感になりすぎて、早漏改善講座を受講したくなるかもしれませ

ん——以前、実際におりましたのでね。それくらい敏感になったら、あなたのオナニー人生はがらりと変わります。もともと、この子のように——』男性は言葉を切り、床で喘ぐ男の子を一瞥した。『へたくそに腰を振る姿はとても可愛く、私からすればいつまでだって見たいものですが、それでも本人がペニス……おちんちんを治したいと思うのなら、協力したいと思っています』

はあ……という熱い息が漏れた。なんだかいやらしいことをされている気分になってしまった。

（おちんちん起っちゃった……）

ただの解説のはずなのに、AVと同じくらいいやらしい。いやAVよりもいやらしいかもしれない。

男の子がオナニーをしているからだろうか。他人のオナニー、しかも床オナなんて見るのは初めてのことだったし、それで——いや、違う。自分と、男の子を重ねて見ている。

カメラの前で、かっこいい男性に見られながらの床オナ。撮影されたものをたくさんの人に見られてしまうと分かりながら、男性に「へたくそ」と言われながら、射精を目指す——恥ずかしいことなのに、それが快感を高めている。きっと男の子も同じように考え、見られることを意識して興奮しているのだと、確信していた。

『床オナで射精はできましたか』

男性が男の子の腰の下を覗き込むようにして尋ねた。

『まだ、ですっ！』

男の子はなお腰を振り続けていた。男性が苦笑し、もう一度カメラに視線を戻す。

『もうしばらくかかりそうなので、説明を続けます。先ほどお伝えしたように、強い快感をくれる床オナを自分一人でもやめるといのはとても難しいことです。それは、こうしてDVDを見ながら進めるだけでも難しいというのが現状です。なので、私たちの講座ではサポートプログラムをご用意しております。通所の場合はその都度事務所に通い、担当講師から直接指導を受けるので続けやすいです。しかし通信コースではやるもやらないもあなた次第になってしまうのです。そこで、講座にご登録いただいた全員に担当サポーターが付きまして、毎日の電話での激励や、不安なことがあったときにご相談に乗るなど、みなさんが無事に床オナを卒業できるように全力でサポートしてまいります』

『ああっ！ あっ、いきたいっ！』

男の子が高い声を上げた。限界が近いのが分かる。

『ん？ イきそうですか』

『はい、はいっ！ イきますっ！ みんなに見られなが、あ、あっ！』

男の子の動きがびたりと止まった。はあはあという荒い息遣いが聞こえてくる。

『おちんちんが落ち着いたら体を起こし、射精した証拠を見せてください』

『は、はい……』

男の子が体を起こした。カメラが動き、男の子の陰部をアップにする。

『あん……』

『隠してはいけませんよ。してはいけないと言われている床オナにはまってしまったんですから、床に擦りつけられた可哀想なおちんちんがどうなってしまうのか、みなさんにも確認してもらいましょう』

『はい……』

男の子が腰を突き出すようにしてペニスを強調した。まだ完全には力を失っていないペニスは濡れそぼり、真っ赤になってしまっている。

AVでは演技や作りものも多いと聞けれど、これは確実に本物だった。

『ほら、赤くなって……少し擦り剥けてしまっていますね。可哀想なおちんちん……』

男性がそっとペニスを持った。精液が指先についたのが見える。男の子は「あんっ」と苦しげに啼いた。

(すごい……えっち……)

他人の精液に触れるなんて。いや、それよりもイったばかりで清めてもないペニスを他人に持たれるという方がいやらしい。

『みなさんのペニスも、このおちんちんと同じように可哀想な目に遭ってきたのだと思います。これからは慈しみ、愛情をこめ、撫でるだけで射精ができるように頑張りましょうね』

画面がまた真っ白になった。続いて【一日目】と表示される。

そこで一度、再生停止ボタンを押した。

(はぁ……すごい……)

もう腰は疼き、ペニスは今すぐの射精を求めている。このままDVDの続きを見ながら床に寝そべり、腰を振りたい。硬い床に腰を押し付け、男性に「へたくそな腰ふり」と言われながら、見下ろされながら……というのを想像しながら射精がしたい。

「はぁ……」

したいしたいしたい。

でも今床オナをしてしまったら、資料請求した意味がなくなってしまう。これでしてしまつては床オナの魅力を高めてしまっただけのようなものだ。

ぐつとこらえ、再生ボタンを押そうとリモコンに手を伸ばしたときだった。テーブルの上の携帯電話が振動を始めた。

(……誰?)

表示されていたのは知らない番号だった。携帯電話でもなく、どこかの一般電話。

(あ、もしかして)

横に置いたままの封筒を手取る。差出人のところに書かれた番号と見比べてみると、同じだった。

「も、もしもしっ」

『突然のご連絡を失礼いたします。通信コースの資料請求をくださった竹下様の携帯電話でしようか』

聞こえてきたのは、穏やかな低音だった。
「は、はいっ！」

正式名称を出さなかったのは、電話番号を誤ったときのためだったのだろう。潤が認めたことで、男性はホッとしたような声で続けた。

『この度は床オナ卒業&男性器敏感化講座の資料をご請求いただきありがとうございます』
「あつ……」

恥ずかしい。でも、そう登録したのだから潤がそういう状態であることは当然知られている。

『私は^{かみちや}錆谷と申しますが、昨日発送いたしましたので、すでにお手元に届いておりますでしょうか』

「あ、は、はい。今、その、ちょうど見て……」

『左様でございましたか。さっそくありがとうございます』柔らかな声で言いながら、錆谷はそこで言葉を切った。しかしすぐ、神妙な声で続ける。『もしかして……今お楽しみにの最中でしたか？』

「え？」

一瞬、意味が分からなかった。しかしすぐ、オナニーをやってしまっていたのではないか、という意味だったことに気付く。

「あ、や、いえっ！ その……えっと、し、してないです！ 今ちょうど説明が見終わったところで」

説明が見終わった——つまり、男の子のイッたばかりのペニスを見た後だと言ってしまったようなものだった。でも羞恥と焦りで頭の中は真っ白だった。

『左様ですか。ではこの後、実際の教材を抜粋したものをご覧いただくものと思っておりますが——ただいまお時間を少々いただいてもよろしいでしょうか』

「あ、は、はいっ！」

もしここでダメだと言えば、それはまるで今からオナニーをするから、みたいに思われてしまうような気がした。

『ありがとうございます』ふわっとした、嬉しそうな声で説明が始まった。『DVDの解説でも軽く触れておりましたが、ご登録後はお一人ずつに担当のサポートスタッフが付くこととなります。通信コースであるからこそ、ご自身の意志だけでの継続が難しいものですから、つらいときにそのお気持ちを吐き出していたり、やり方が分からないときにお尋ねいただいたり……あとは進捗の確認も、担当がさせていただきます』

「進捗……ですか」

その話はホームページにもDVDにもなかったように思う。

『はい。今からご覧いただく続きにも出てはくるのですが、基本的には毎日、進捗のご報告をいただけるようお願いしております。とてもデリケートなことですから強制はしておりませんし、報告しなかったからといって退会になるようなことはございません。こちらはあ

くまでモチベーションの維持にご利用いただく、というものなのですが——』

そこで鐺谷は念を押すように言葉を切った。

一呼吸置かれたことで緊張感が高まり、唾をこくりと飲み込む。

『何の進捗をご報告いただくことになるのかは、竹下様の状況次第となっております』

『僕の状況、ですか』

『はい。床オナ卒業&男性器敏感化講座と一言で申しましても、ただ決まったものをお送りするわけではないんです。進捗をお送りいただければ、その方のタイプに応じて次回の教材を変更してまいりますので』

「すごい……そうなんですね」

『はい。ですから、進捗のご報告は極力していただくようお願いしております』

手厚いし、これなら続けられるような気がした。教材費は高額でかなり痛い出費にはなるけれど、ペニスの感度を戻せる——一般的なものにできるのならそれが一番大事なことだ。

『ここまで、何かご質問はございますか』

「あ、えっと、その担当になってくださる方ってというのは——」

『お選びいただくことも可能です』

「あ、それがDVDの最後にあるって書いてあったやつですか」

人を選ぶというのに「やつ」という言い方は失礼だっただろうか——そう不安に思ったのに、鐺谷は嬉しそうな声を出した。

『最初にお読みください、という書類もきちんとお読みくださったんですね。ありがとうございます。ただそちらにあるのはお送りするDVDの出演者の選択でございまして。サポートスタッフはまた別となっております』

「あ、そうなんですか」

なんとなく、それなら鐺谷がいいなと思った。話し方も優しいし丁寧だ。それに——あまりたくさんの人に床オナが好きだとバレたくはないし、鐺谷は快感に弱い潤を馬鹿にするような雰囲気もなかった。

しかし、こうして営業の電話をしてくるくらいなのだからサポート担当ではなくコールセンターとか、それこそ営業のスタッフのようにも思う。そうなると——誰を選んだらいいのか全く分からなかった。

(でもダメ元で訊いてみようかな……)

訊いてみて、ダメだったらそのとき出された中から選ばばいいのだ。

「あの……」

『はい』

「鐺谷さんは、そういう担当の方ではないんですか」

『私、ですか』

その反応から、やはり違うのだろうとすぐに分かった。

「あ、あの、すみません、気にしないでください。話し方が優しくかったので——」

ただそれだけです、とは言えずに口を閉じると、また嬉しそうな、ふわっとした声が聞こえた。

『ありがとうございます。ご登録いただいた際は、私が竹下様のサポートを担当させていただきます』

「あ……」

嬉しい、と素直に思った。そして同時に、もう後にはひけないな、とも。

しかし鍋谷は落ち着いた声で続けた。

『でもまずは、一度DVDを最後までご覧になってみてください。まだ今は突然の床オナ披露で高揚しているだけの可能性もございますので』

「あ……」

営業すべきだろうに、そんなことを言ってしまったていいのだろうか——しかし、そんな誠実さにも好感が持てた。

『一度最後までご覧いただき、それから一晩ゆっくり寝て……できれば今夜はオナニーはせずに我慢していただきたいところですが、それからじっくりとお考えいただければ嬉しいです』

「はい。ありがとうございます」

無理な営業はされなかった。ただそれだけで、なんだかいいな、と思えた。

携帯をテーブルに戻してリモコンを持つ。再生ボタンを押すと、テレビはすぐに動き出した。

【一日目】

今度、男の子はベッドの上に座っていた。男性はその子の背後に座り、お腹に手を回している。

『では、始めていきます』

どうやら男性が主体となって進めていくらしい。セクシーな声が腰に響く。

『みなさんのペニスはこの子のように勃起していますか』

男性が言うと、カメラが男の子の陰部を大きく映した。どうやらオナニーの後、そのまま撮影が続けられていたらしい。ズームされたペニスは真っ赤なまま、ところどころ白いもので濡らしている。

『この子はさっきいったばかりなのに、まだこうして濡らしています。——普段、どれくらいオナニーするんですか』

男性が問うと、男の子は顔を赤らめつつ口を開いた。

『一日に、三回くらいです……最初の二回は連続でして、それから数時間後、またえっちな気分になったらオナニーをします』

——ということとは、連続射精に慣れているから勃起したままなのか。

『このDVDを見ているみなさんはどれくらいオナニーをしていますか？ 体はしっかりとその頻度に合わせて動いており、普段のオナニー頻度が高いほど、これからの訓練はつらく

なります。射精ができない日が続けば陰嚢は重苦しく、破裂してしまうのではないかと怖くなることもあるでしょう。でも大丈夫です。吐き出されなかった精子は勝手に体に吸収されていきますので、大事なところが破裂してしまうようなことにはなりません』

身体的説明——そのはずなのに、まるで言葉責めをされているような気分になった。男の子の頬も上気し、口は半開き、目はとろんとなっている。

『では、まずはペニスをそっと持ってください。力を入れてはいけません。ペニスをシャボン玉だと思ってください。触れたら割れてしまう……それくらい、そっと優しくです』

言われたとおり、ペニスを持ってみた。普段ならこの程度では何も感じないはずなのに、まるで催眠にかかったかのようにペニスがドクンと脈を打った。

「あつ……」

いやらしい。まだ優しく持っただけなのに。

画面の中でも、男性が男の子のペニスを持っていた。男の子も潤同様、たったそれだけの刺激で切ない表情を浮かべている。

『そつとですよ。指をペニスに密着させてはいけません。大切なペニスにはあまり触れないよう、指との間に空気のクッションを含ませるようなイメージで』

「あつ……」

今までごりごりと痛めつけられていた可哀想なペニスを大事にされているような気持ちになり、思わず声が漏れてしまった。

『では、その手をゆっくりと動かしてください。そつとですよ。扱くんじゃありません。撫でるんです。今まで痛い思いをさせてごめんね……そう語りかけるように撫でてください』

『あつ、あつ』

床オナでもなかなかイけなかったはずの男の子が、悩ましげな声を出した。感じている。

『いかがですか？ この子のおちんちんのように、みなさんのペニスも大事にされて悦んでいますか？』

「あつ……」

下を見ると、ペニスはしっかりと勃起していた。最近、ここまで硬くなることはなかったのに。

「悦んでる……」

自分の体の一部のはずなのに、ペニスが可愛く見えた。今までたくさんいじめてしまったのに「気にしなくていいよ」と慰めてくれるような。

『ではそのままそつと……そうですね、十五分、撫でてあげましょう。間違っても射精しようなんて思わないでくださいね。今日は、今までごめんね、という気持ちを伝えるための日ですから』

男性がゆっくりと手を動かした。その様子がアップになり、画面の端にタイマーが表示される。

男性の手に撫でられる男の子のペニスを見る。先ほどから真っ赤なままで色は変わっていない。

ないはずなのに、まるで興奮に染まっているように見えた。

見ているだけで、はぁ……と熱い息が漏れる。

なんていやらしいのだろう。

目を閉じて、頭の中で男性の手にある男の子のペニスを自分のものと置き換える。

「ん……はぁん……」

そつと撫でられているだけ。なのにペニスは疼き、悦びの涙を流し始める。

(すごい……)

たったこれだけで感じるができるなんて。

右手を一度離し、今度は左手でペニスを持ち、右手で上からそつと撫でてみる。小動物の頭を撫でるように亀頭を擦ると、尿道口にぷくりとカウパーが溜まった。

『さあ、そろそろ十五分です。みなさんのペニスはどうですか？ 悦んでいますか？』

「あ……」

もう十五分も経ったのか。でももっとしたい。いつまでも撫でていたい。

『これで今日はおしまいです』男性がきっぱりと言った。『もちろんこの後にオナニーなんてしてはいけませんよ。床オナでなくてもダメです。ペニスは下着の中にしまつて、きちんと手を洗ってください。そして明日から一週間、これを毎日繰り返し返してください。どんなに苦しくても、射精がしなくなっても、強く握ってはいけません。そつと優しく撫でるだけです』

(え?)

一週間——その言葉に耳を疑った。

『とても苦しいですが、頑張りましょう。つらかったらいつでも電話をしてください。時間がない、恥ずかしいという方はメールでもかまいません。一人でつらさを抱え込まず、私たちに話してください』厳しい声から一転して、優しい話し方だった。『泣きながらの電話でもかまいません。ペニスがつらいと話してください。一緒に、頑張りましょうね』

男性が「それでは」と言うと、画面が一度真っ暗になった。

【七日目】

サンプルはまだ続くようだった。このまま見続けてしまってもいいのか分からなかったけれど、錆谷が電話で言っていた「進捗の提出」の話が出てこないのです、そのまま見続けることにした。

『こんにちは。この一週間、いかがでしたか？ 撫でているだけで射精ができた、という人はおそらくいないんじゃないかなと思います。きつとその程度で射精ができるようなら、このコースにはたどり着いていないですよ。では、今日の分を始めていこうと思います』場所はまたベッドだった。先ほどと同じように、男性が男の子を後ろから抱きかかえている。

『見てください。このおちんちん、一週間射精できなかっただけでこんなに硬く勃起してしまっています。とても苦しそうですね。同じような状態の人もいると思います。とてもつらいでしょう。でもきつと毎日たくさん撫でたことで、「可哀想」と思えるようになってい

思います。もしまだ可哀想だと思えていないようなら、自分のペニスを可哀想だと思えるまで前のDVDを繰り返し見て、撫で続けてください。これ以降を見るのは、その後です』

口調は優しいのに言っている内容はとても厳しい。

潤はまだサンプルとして見ているだけで、実際にDVDのとおり経過した後に今の言葉を耳にしたら、この人のことを怖いと思ってしまうかもしれない。

(でもそれくらい真剣になってくれるってことだよね……)

床オナに慣れたペニスの感度を戻すというのは並大抵のことではない、というのは他のサイトにも書かれていた。そういう治療を行えるクリニックでは勃起促進の薬を飲むという方法さえ書かれていた。でも薬に頼らず自分の力でどうにかする——それなら、これくらいの厳しさは必要だということだろう。

『では今日もまた、最初にご挨拶から始めていきます。そっとペニスを持って、昨日と同じように五分間撫でましょう。優しくですよ。ペニスを驚かせてしまわないように、ご挨拶だということを意識しながら撫でてください』

男性は、それきり口を閉ざした。どうやらDVDの中でもきっかり五分、男の子のペニスを撫で続けるらしい。画面の端にタイマーが表示された。

「はあっ……」

自分で時間を計らなくていいというのはとてもありがたかった。時間を気にすることなく、ペニスを撫でることに集中することができる。

「んっ……」

今までごめんね、という気持ちを込めて何度も撫でた。それに応えるようにわき出るカウパーがいとおしくも感じられる。

『はい、そろそろ五分です。みなさんのペニスは撫でられて悦んでいますか？』

カメラがベッドに寄り、男の子のペニスが大きく映った。

(わ……えっち……)

男の子のペニスはぐっしりと濡れていた。潤のペニスの比ではない。今にもカリ首から液体が滴りそうなほどの量だ。

『では、今日はこの一週間のご褒美として少しだけ快感を増やしてみましよう。でももうペニスに触れてはいけません。こうして——』

男性はそこで言葉を切り、男の子の胸に触れた。

『まずは乳首です。両方の乳首を、そっと手のひらで撫でてみましよう。乳頭をつまむようなことはまだしてはいけません。一つ一つ順番に、敏感な感部を驚かせないようにすることが大切です』

『あんっ！ あっ、あっ』

『どうやらこの子は乳首が大好きなようですね』

男の子がふるふると首を振った。恥ずかしいのか、しっかりとした刺激がもらえないものと

かしさをなんとか紛らわせようとしているのか。

『まずは五分です。五分間、手のひらで乳首をそっと撫でましょう。するとだんだん乳頭が硬くなってくるのが分かるかと思えます』

潤も、真似して乳首に触れてみた。しかしあまり気持ちいいとは思えない。今まで一度も性的に触れてみたことがなかったからだろうか。

(うーん……)

画面の中では男の子が高い声を上げ続けている。右上に出たワイプには男の子の亀頭がアップで表示されており、そこを見ても本当に感じていることがよく分かる。

~~~~~

昼間のファミレスバイトを終え、痛む足を引きずるようにして次のバイト先である居酒屋に向かう。

一步踏み出す度、長いこと射精できていないペニスに響いた。もうどうにも重苦しいけれど、心の中ではいつでも鎬谷が慰め、励ましてくれていた。

——苦しいですね。

はい……。

——でもその苦しみは、潤くんが一生懸命頑張っている証ですよ。

頑張ってる……？

——はい。潤くんはとてよく頑張っています。今はおちんちんがつかいですが、目標に向かって一緒に頑張らしましょうね……。

「おはようございます」

更衣室に入ると、そこには普段ほとんどいることのない店長が事務机に座っていた。

「竹下さん、ちょっと」

「はい」

荷物を置いて、店長の前に立つ。

二週間前にこの店に異動してきたばかりの店長とは、まだそれほど話したことがない。店長の方から潤と距離を置いているように感じられたし、潤も店長の目つきや話し方がなんとなく好きになれなくて、挨拶程度で済むことをラッキーと思っていた。

「これ、次のシフト表」

「——え？」

ぶつきらぼうに渡された紙を見て、それから目の前にいる店長に視線を戻す。

「だから、これからは週一で」

だから、と言いながら何の説明もない。

「え、でも……」

突然申告されたシフトの減少。今までは週六で入っていたのに、まさか急に週一にされてしまうなんて。

「今週いっぱい、ホールの子が一人辞めるんだよ。で、ほら、竹下さんは厨房で立ってるだけでしょ？ 足も痛そうだし、今はうちも経費削減、人件費削減ってさ、うるさいんだよ。来週からはホールも調理もできる子が入ることになったし、君はもういいよ」

理屈は分かった。でもだからといってこんな急に減らされてしまうなんて。

「それでも週一は残してあげてるんだから感謝してよ。でもまあ、他にも掛け持ちで働いてるんでしょ？ 週一で入っている間に次の仕事見つけて」

「あ——」

呼び止める間もなく、店長は更衣室から出て行ってしまった。一方的に話し、それでも用はないと言わんばかりに。

いつかはこうなるだろうと思っていた。けれど、まさかこんなに早く、しかも急にだなんて——。

(……週一で入ってる間に、って……)

ということは、しばらくしたらそれもなくなってしまうということだろう。まるで感謝しろと言わんばかりだったけれど、どうにも納得はできない。

しかし、足の痛みがひどくなってきたのも事実だった。他の人のように忙しいときにホールの手伝いをすることもできないし、厨房内でもあまり動けないので、みんなに迷惑をかけている自覚もあった。

それでもここまで続けてきたし、極力迷惑にならないようにと頑張ってきたつもりだった。

(……前の店長は優しかったなあ……)

大変だね、と言っているいろと融通を利かせてくれた。あまり動かなくて済む業務を割り当ててくれたのもその人だった。異動になってしまったときは悲しかったし不安もあったけれど、「ちゃんと次の人にも引継ぎをして、働きやすい環境にしてくれるように言っておくから」と言ってくれていたのに。

(……たぶん、ちゃんとってはくれてたんだよね……)

でも今の店長がそれをよしとしなかっただけだ。

(はあ……)

これからどうしたらいいのだろう。それなりに時給のいい居酒屋のアルバイトが週に五日も減るとなると——生活していけるだろうか。

(とにかく次の仕事を探さなきゃ……)

ここから近くて、今と同じ時間帯だけでも雇ってくれるところ。学歴がなく、足が不自由でもいいと言ってくれるところ——あるだろうか。

必死に考えてみても、一つたりとも浮かばない。

(どうしよう……)

困った。

できれば座ってできる仕事がいい。でも夜の時間帯でそんな仕事があるだろうか。  
「おはようございます！」

突然聞こえた元気な声に振り返ると、アルバイトの男の子たちが入ってくるころだった。

「あ、おはようございます」

「あれ、竹下さん着替えまだですか？」

「あ、すみません、すぐに」

更衣室は広くない。手早く制服に着替え、厨房に入る。

「おはようございます。お疲れ様です」

仕事が始まれば余計なことを考えている暇はない。とにかく今は目先の仕事をこなさなければ。  
まるで現実から逃避するように、フライパンに手を伸ばした。

※ ※ ※

「あれ、先輩、今日は行かないんですか」

「ああ……」

一昨日までは鍋谷の方から架電していた。しかし昨日からは潤の用意が整うのを待つ必要があったため、今は電話を待つことしかできない。

「先輩、最近戻り遅いから実はどこかで寝てるんじゃないかなって思ってたんですけど」

「まさか。プライバシーに配慮して別室で電話しているだけだ」

「分かってますよ。で、そろそろ口説くんですか」

「は？」

「だいぶ慎重になってるのかなって思っただけ。もう仕事の話は振ったんですか？」

上田の言うとおり、潤をスカウトしたいという気持ちはあった。鍋谷のパートナーとして出演させ、そのいやらしい姿をたくさんの人に見せて自慢したい。潤自身も撮られ、見られることに興奮できるタイプではあるように思う。しかしまだ、そんなことを話せるような仲ではない。

「まだだ」

「つてことは……今外堀を埋めてるんですか」

「外堀？」

「退職に追い込む、とか」

「まさか」

「一人暮らしさせる、とか」

「元から一人暮らしだ」

言っただけから、しまった、と思った。別にそれくらいのこと言っても問題はないのだが、単純に潤のことはあまり人に言いたくなかったのだ。

「そうなんですか。じゃあちよつと押せばいけるんじゃないですか」

「押せばって……」あけすけな言い方に顔をしかめる。

「何の講座にするんです？ 今一番人足りてないのってアナレイキでしたっけ」

上田が下品な顔でにやりと笑う——そのとき、背後から声が掛けられた。

「上田、これ明日発送の分の鍵」

割って入ってきたのは貞操帯の鍵管理担当、庄司だった。小さな箱を差し出し出している。

「あ——すみません」

「ほら、さつさと発送準備して来いよ」

庄司が犬を払うように手を振ると、上田はおもちゃを取り上げられた子供のような顔で、とぼとぼと部屋を出て行った。

「全く……」庄司が深いため息とともに呟く。「もう少しうまくやれよ」

「助かったよ」

「あいつ、少し調子に乗り過ぎなんじゃねえか？」

庄司が胸ポケットから煙草ケースを取り出した。しかし禁煙フロアでは吸うわけにもいかず、スン、と匂いを嗅ぐだけでしまう。

「若さ故だよ。俺らにだって同じような経験があるだろ」

「まあなあ……」

庄司はまだ納得がいかないようだった。中高大と野球に明け暮れた体育会系には、上田のへらへらした態度が気に入らないのだろう。

しかしもう話すこともないと思ったのか、自席に戻って仕事を始めた。そういうさっぱりしたところが庄司のいいところだな、と鑓谷は思う。さりげなく鑓谷を助けるために会話に入ってきたのだが、何にどう困っていたのかを訊くようなことはしない。しかしこちらが話せば、最後まで真剣に聞いてくれるのだ。

(……電話は……来ていないな)

話している間も席にいたのだから、潤から連絡が入っていないことは分かっている。しかしそろそろ二十三時だ。訓練どころかもう寝る時間になってしまうだろう。

(残業か……?)

もしくは体調でも崩したのか——どう考えても、潤は勝手にやめてしまうような子ではない。それにやめるにしたって、鍵の取り出し方を聞かない限り貞操帯を外すこともできないのだ。

(まさか事故にでも——)

そう思ったらいてもたってもいられなかった。カバンも持たず、そのまま駆け足でフロアを出る。

「わっ！ ……あれ、先輩、どこに——」

「少し出る。時間になったら忘れず帰れよ」

ドアのところでぶつかりそうになった上田に投げかけ、そのまま大急ぎで駐車場に向かっ

た。

約十二万字。

前半はエロメインですが、後半は鎌谷との恋愛模様が多めです。

床オナ・オナニー指導・焦らし・射精禁止・貞操帯・カウパー・乳首・オナニー・腸内洗浄・羞恥・恥垢・尿垢・尿管・年の差・敬語攻め・不憫受け・障害

お読みいただきありがとうございます！

お悩み解消通信講座1 サンプル

goneone (うーわんわん)

2021/ 3/ 26

メール: goneonegoneone@gmail.com

pixiv: 19591291

Twitter: @goneone11

LINE: goneone

